

■ 調査研究

「全学共通教育平成18年度実施に向けた研修会(FD)」報告

大学教育開発センター	武重 雅文	早川 茂
		山田 勇
	毛利 猛	辻上 佳輝
	古川 尚幸	板野 俊文
	若林 利明	木村 義雄
	竹中 龍範	石川 雄一
	安井 修二	葛城 浩一
総合情報基盤センター		林 敏浩

以下では、「全学共通教育の平成18年度実施に向けた研修会（FD）」の報告を行う。この研修会は、本年が3回目であり、第1回目と同様に、講義形式と分科会毎のワークショップ形式を採用した。

目 次

第1部 問題提起

- I. 平成18年度全学共通科目の再編等について
- II. E-learning について
- III. 平成17年度までの改革とその評価－「学生による授業評価」の結果－
 1. 授業の到達目標の達成に向けた改善への取り組み
 2. 問題提起－「学生による授業評価」と「教員による成績評価」から－

第2部 来年度授業計画作成に向けたワークショップ

- A. 主題科目分科会
- B. 共通科目分科会
- C. 教養ゼミナール分科会
- D. 外国語分科会
- E. 健康・スポーツ科目分科会

参考資料 研修会アンケート

第1部 問題提起

I. 平成18年度全学共通科目の再編等について

全学共通科目の再編と次年度のカリキュラム

(1) カリキュラム再編の方針

- ① 今回の改革案は主題科目、教養ゼミ及び共通科目を対象とする。

なお、外国語及び健康・スポーツ科目については、現在改革が進められているものもあり、成案が得られ次第さらに改革を図りたい。

- ② 主題科目に関して現行の4主題を改編し、「人間と生命」、「人間と文化」、「テクネーと社会」、「歴史と現代」、「国際・地域」及び「環境・生活」の6主題とし、各主題8講義、計48講義を開講する。その他に特別主題として、「瀬戸内」、「人生とキャリア」及び「健康」を設定し、各々最低1講義を実施する。

なお、特別主題は、プロジェクト研究（学長裁量経費）の成果公表等も考慮し、適宜増加・変更可能な主題とする。

主題科目に関する必要単位数は8単位とし、特別主題からの2単位はこの中に含めることができるものとする。

なお、継続性を勘案し、従来の講義題目はできる限り、新主題に配置できるよう工夫するとともに、学生の新旧科目読替にも柔軟に対応するものとする。

- ③ 共通科目に関しては、従来の教育目標をより明確に表現できる構成とする。共通科目にはディシプリン入門的な内容と専門基礎ないしは補習教育的な内容が含まれるが、トピックに特化する主題科目も対してディシプリン入門的な内容に特化させ、共通科目の特徴を表現する授業内容とする。

なお、一部の理系科目では専門基礎性を重視した授業を増大させる。また、統合時に設置された生命科学及び心身科学を廃し、医学及び看護学を加える。

- ④ 教養ゼミ科目に関しては、ともすれば教員の自由判断で実施されている傾向を廃し、大学生としての基本的な資質を養成する導入教育としての教育目標に忠実な内容に修正する。このため、標準的な授業内容を提示するなど、科目の意義・教育目標を徹底できるシステムを構築する。

(2) 次年度のカリキュラム

- ① 主題頭目：上記の方針に従って6主題48講義と特別主題3講義を開講する。なお、中四国共同授業を例年通り主題科目に加えるので、総計は52講義となる。

- ② 共通科目：上記の方針に従い、従来実施してきた工学部に加え、医学部、農学部で基礎的な講義を実施する。その他に関しては入門的色彩を強化する。新たに、医学、看護学各1講義を開講する。
- ③ 教養ゼミナール科目：教養ゼミナールに関しては、科目の意義、教育目標の徹底を図る。

(3) 次年度以降の検討事項

四年一貫教育の観点から高学年教養科目を設置できるよう、早急に検討する。すでに工学部では工学教養科目を設置し、学部の3年次以上のカリキュラムに加えているが、高学年次の全学共通に開放することも考えられる。工学部以外で、同様の主旨をもつ科目があると思われる。全学の教務委員会等で、高学年教養科目の開放について、早急に検討が行われることを提案する。

II. E-learningについて

はじめに

近年、教育現場に計算機（パソコン）が多く導入され、いわゆる情報教育（情報リテラシ）だけでなく、既存の教育分野への利用が盛んになっている。例えば、プレゼンテーションソフトを利用して講義をしたり、講義資料をWWWにアップして学生に電子配布したりすることが珍しくなくなっている。また、そのようなコンテンツを利用して予習・復習を行わせている場合もある。このような計算機を利用した教育形態を近年 e-Learning と呼ぶことが多い。しかし、e-Learning に関する情報は、よく知っている先生もいれば、ほとんど知らないという先生もいるというのが現状である。本報告では、後者であるが e-Learning に興味がある先生方に e-Learning の概要を紹介できればと考えている。なお、本報告は、平成17年12月14日（水）に開催された全学共通科目FD研修会での e-Learning の紹介をまとめたものである。

e-learning とは？

e-Learning の定義を書物やWWWなどで調べると実はいろいろあることがわかる。その代表的な定義として「e-Learning は情報ネットワークや他の情報技術（IT）を用いた学習者主導の学習」を挙げることができる。この定義は IT を利用すればすばらしい教育・学習環境が e-Learning として実現するようになる。しかし、e-Learning がまともにワークするためには以下のようにいくつかの前提がある。

- (1) 学習者は積極的かつ自立的に学習にのぞむ
- (2) 学習コンテンツとその学習ゴールが適切に構成・設定されている
- (3) 学習者に十分な対話環境が提供されている
- (4) e-Learning 導入ができる（許される）教育環境がある

また、これら前提は実は成立しているとは限らない。この認識が甘いと e-Learning 実践が失敗する可能性が高くなると考える。

e-Learning は新しい考え方なのか？

e-Learning を研究領域に含む教育工学の世界では、e-Learning は必ずしも新しい教育方法として捉えられていない。計算機を利用した教育は、1950年代より CAI (Computer Assisted Instruction) 手法として研究・実践が行われてきた。代表的な CAI システムの役割は教師の代替または学習環境の提供である。10年ほど前までは高価なわりに低機能な計算機しか利用できず CAI 手法が広く普及するに至らなかった。CAI システムは計算機以外に情報ネットワークを利用するものも古くからある。このような利用している機器・設備の観点からは伝統的な計算機利用教育である CAI と e-Learning が区別できない。現在、e-Learning は CAI 手法を含む広い概念で使われており、実は必ずしも新しい概念ではないのである。

高等教育（大学教育）と e-Learning

e-Learning を広い概念でとらえると多くの教育方法・実践が範疇に入る。例えば、大学教育ではどのようなものが e-Learning に含まれるか、以下に代表的な教育方法・実践を示す（紙面の都合上、個々の詳細な説明は省略するがインターネットでキーワード検索すると最近では多くの情報を得ることができる）。

- (1) バーチャルユニバーシティ
- (2) バーチャルキャンパス
- (3) 通信衛星 (SCS) を用いた遠隔教育
- (4) 地上インフラ (インターネット) を用いた遠隔教育
- (5) 産学連携による教育の手段
- (6) 生涯学習の手段
- (7) 自学自習支援
- (8) CAI (シミュレーションなど)
- (9) 協調学習支援 (CSCL)

もちろん、1つの e-Learning の方式・実践で上記全てを実現する訳ではなく、個々の特徴に応じて e-Learning の形も変わってくる。香川大学の中期目標にも e-Learning が挙げられているが、このような多様性を考慮すると、適切な e-Learning 環境構築および実践運用には、「香川大学は e-Learning としてどのような教育方法・実践を目指すか」について明確にする必要があると考えている。

e-learning の特徴

e-Learning にも長所と欠点がある。しかし、e-Learning ベンダの宣伝などでは長所が非常に強調されて、欠点が見えにくくなっている。図1は e-Learning の代表的な長所と欠点を示している白色の箱が長所、灰色の箱が欠点である。特に欠点の部分に注意して e-Learning を計画・実装・実践すれば、e-Learning が失敗する可能性を軽減できると考える。ただし、これは「欠点を全てクリアすれば e-Learning が必ず成功する」と言っているわけではない。e-Learning の成功にはさらに何らかの仕掛けが必要と考える。その仕掛けを考えるのが実は難しいのである。

個別学習	多数の科目	迅速なコンテンツ配信	低い学習コスト
自立的な学習	いつでもどこでも	対話的インタラクティブ	高い運用コスト
学習の豊富な機会	学習進度の制御が容易	サポートスタッフの必要性	高い導入コスト
教育の改善(FD)	コンピュータとネットワークが必要	スタッフ教育の必要性	高い開発コスト
孤立した学習	モチベーションの維持が困難	質問しにくい	著作権などの法律上の問題

図1：e-Learning の長所と欠点

e-Learning の典型的な構成

e-Learning に手を出すと、それを支援する様々なソフトウェアがあることにすぐに気がつく。それも英語名や略記名が多く訳がわからないので、この時点でe-Learning 実践に対するモチベーションが下がるかもしれない。しかし、ポイントになるソフトウェア（本稿ではLMS、WBT、CBTのみに限定）を押さえるとe-Learning の構成が見えてくる。

図2は典型的なe-Learning の構成である。最下層のLMSはLearning Management Systemの略でありe-Learning 運用の基盤システムになる。具体的には、LMSは履修管理、出席管理、レポート受付管理などをWWWベースで実現しているのが一般的である。LMSの上のWBTとCBTはそれぞれ、Web Based Training、Computer Based Testing の略である。WBTは主に自学自習のための教育コンテンツを提供し、CBTは電子的に試験を行うものと考えてよい。さらに上層として、デジタルライブラリ（電子図書館）等との連携が考えられる。ただし、LMSの高機能化でWBTやCBTの機能を含んだりするのでこの構成が数年後も言えるかは保証できないのであるが…

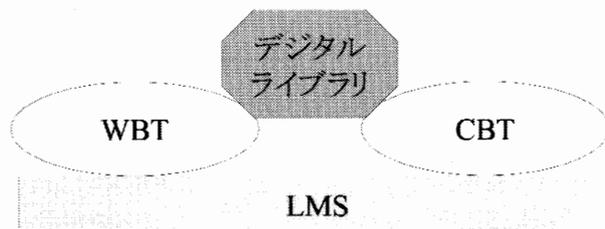


図2：e-Learningの典型的な構成

私のe-Learning 実践

現在、多くの大学でe-Learning 導入が進められている。e-Learning の導入方法にはトップダウン手法とボトムアップ手法の2種類がある。トップダウン手法とは、大学が主体になってe-Learning

環境を教員に提供し、教員はその環境下で e-Learning 実践をする形態である。これに対して、教員が個々に e-Learning 環境を構築し、そこで e-Learning 実践を行うのがボトムアップ手法である。本稿では、ボトムアップの e-Learning 実践として、私が前任の佐賀大学時代から継続実践している e-Learning 事例を紹介する。

私の実践は e-Learning と対面講義の融合であるブレンディッド・ラーニング (blended learning) がポイントになる。これは、前提知識の予習や講義の復習を e-Learning で行い、対面講義では前提知識習得を前提に演習・問題解決型講義を行うものである。特に、本実践では予習に重点を置いたブレンディッド・ラーニングを行った。

予習用の e-Learning 教材素材として、講義ノートの電子ファイルを Power Point 上で整形してスライド形式の資料を作成した。さらに個々のスライドにつける説明を音声録音した (これはフリーのソフトを利用した)。これらの素材をマイクロソフト社の Producer というフリーソフトを用いて編集し、図3のようなWWW教材を作成した。これをWWWにアップして学生に予習するように指示した。なお、ちゃんと予習しない学生を想定して、スライドの最後に小問題をつけて講義前までに解答を電子メールで私に送らせるようにした。また、全ての小問題の解答を送らないと定期試験の受験資格を与えないことにして、解答送付を強制した。

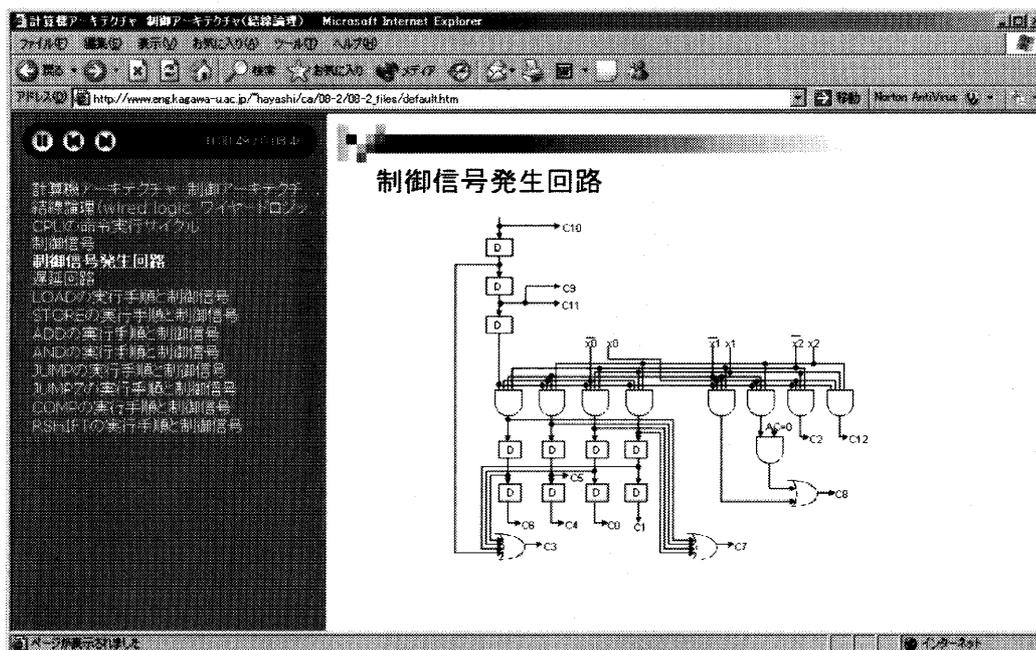


図3 : Producerで作成した教材

次にこの実践の効果に関しては、本e-Learning 実践後の定期試験の結果は良いとは言えず、残念ながら e-Learning の優位性を示せるものにはならなかった。後日、学生へ質問をしてその原因がいろいろ見えてきた。例えば、学生は予習する時間が十分にあるにもかかわらず予習していないという前提だったが、他の科目のレポートに追われて、e-Learning の予習の時間が十分に取れなかったという学生の意見があった。また、教材は短めに時間設定したつもりだったが、それを見続けるのがつらかったという意見もあった (たぶん、レイアウトなども含めて見せ方を改善しないとイケないと考

えている)。このように良い結果がでなかったのはショックだったが、実はもっともショックだったのは、あるBBSに「林先生、e-Learningだけは止めてくれ」という書き込みをされたことである。しかし、まだまだ改善をする余地があるので、これらを参考によりe-Learning実践をできるように努力していくつもりである。

e-Learning 導入の留意すべき点 ～まとめに代えて～

これまでのボトムアップ的なe-Learning実践を通じてe-Learning導入の留意点が見え始めてきた。ここではそれら留意点について本稿のまとめに代えて紹介する。読者の先生方のe-Learning実践の参考になれば幸いである。

(1) 前提が成立しているか確認すること

「e-Learningとは？」で述べたような前提が成立していなければ、事前によく検討して前提が成立するための仕掛けをしなければならない。その確認なしにe-Learningを実施するのは危険である。

(2) e-Learningの目標・目的を明確にすること

「誰に」、「何を」、「どのように」教えるか明確にしないとイケない。例えば、ブレンディッド・ラーニングでは、これまでの講義内容のどの部分をe-Learningに回すのか？どのようなコンテンツ（説明型、ドリル型など）にするのか？などを明確にする必要がある。

(3) 学生・自分にとってのメリットは明確か？

学生・自分へのメリットが明確になると実践後の結果を評価しやすくなり、今後の改善にもつながりやすい。また、学生に対してはそのメリットを強調することにより、e-Learningに対するモチベーション維持にも効果があると考えられる。

(4) LMSなどの支援環境に甘えないこと

LMSがあってもe-Learning導入はきついことを認識しないとイケない。LMSはe-Learning導入で発生する付加的なタスクの一部を軽減するのみで、以前より講義準備などの負荷は高くなるくらいと考えておいた方がよい。

(5) 段階的e-Learning導入は自分を過信しないこと

講義が始まる前に全てのe-Learningコンテンツが準備できているのが望ましいが、実際は自転車操業で、e-Learningコンテンツを作成しながら講義が進行するケースが多いのではないかと考える。このようなやり方は途中で息切れしてe-Learningが続かなくなる可能性があるため注意が必要である。

(6) 本当にe-Learning手法が必要なのか考えること

「e-Learningが必要ないのであればe-Learningはしない」というのは賢明な判断であると考えられる。これはe-Learningを否定しているのではない。無理なe-Learning実践は波及するデメリット（e-Learningに対する悪い印象が広がるなど）が大きい場合があるので注意が必要ということである。

Ⅲ. 平成17年度までの改革とその評価－「学生による授業評価」の結果－

1. 授業の到達目標の達成に向けた改善への取り組み

大学教育開発センター調査研究部の仕事の一つとして、私たちは、香川大学中期目標・中期計画のうち①教養教育・専門教育・大学院教育のそれぞれについて明確な教育目標、教育到達度を設定し、適切な試験、評価方法を採用し達成度を検証する ②学生、同僚や外部委員による授業評価などを導入し、評価結果を公表するとともに、教育改革に活用する ③学生が自ら課題を見だし、意欲を持って自ら学ぶことを促す教育方法を推進する－ これらに基づいて様々な改善を行ってきた。この改善の詳細な内容については皆さんの手元に届いている香川大学教育研究第1号、第2号をご覧ください。

これまで、シラバスについての改善を行ってきた。一般的に共有されているシラバスの定義としては、名古屋大学高等教育研究センターの作成したものを例として見ていただきたい。ここでは次のように4点あげられている。①学生が履修計画を立てたり、科目選択を行うための情報源 ②教師と学生が結ぶ公的な「契約書」 ③授業全体（コース）の設計書 ④学生が授業内外で行う学習の指針。

2003年以前の香川大学全学共通科目のシラバスは次のようなものであった。

1) 履修形式等基本情報 2) 授業名・コード／単位数／開講学期／曜日・校時／教員名 3) 授業概要・計画 授業概要／授業方法／教科書／授業計画／単位認定方法／受講上の注意 4) 自学自習情報 指定図書／参考書・辞書 5) その他

ここで見られるように、授業の到達目標は入っていなかった。そこで、調査研究部で様々な議論を行い、授業を行う際にはシラバスに到達目標を載せるべきでないかということが話し合われた。統合後の医学部の方々の話し合いの中で、医学部のシラバスに記載されている行動目標が授業の到達目標を記載するにあたって大きな参考となった。その結果として、シラバスに授業の到達目標を書くことが必要であると判断した。そこで、2004年度の全学共通科目の授業では到達目標を書いてみようということにした。そのために、調査研究部でモデルシラバスを作成し、全学共通科目実施に向けての研修会で提案した。この図は、このときに提示した法学部の松井先生によって書かれたシラバスである。このシラバスには到達目標として、このように4点が書かれている。学生はこの授業を受けて、この4点をよく理解すれば良いんだということが分かる。

2005年度になると、シラバスの全学統一フォーマット作成ということになり、全学共通科目と学部開設科目のすべての科目で共通のシラバスを作成するようになった。これまでに記載されていた授業科目や授業概要などに加えて、授業の目的、達成目標を書くことになった。このシラバスは私が分担している希少糖についての主題科目授業のシラバスであるが、授業の目的、達成目標としてここに書かれており、この点に関してよく理解してくださいということである。

このようにして、全学共通科目のシラバスへの授業の到達目標の記載から全学の授業のシラバスに展開されてきた。

シラバスに到達目標が記載されるようになり、学生の授業評価のアンケート項目にシラバスに書かれた到達目標を使うことができるようになった。これが、次のような授業評価項目となった。

Ⅲ－1 シラバスに、授業の到達目標がわかりやすく書かれている

Ⅲ－2 授業の到達目標の達成に向けて、授業全体が組み立てられている

IV-1 あなたは、この授業の到達目標を達成できましたか

これらの結果が、前期の授業評価結果としてまとめられた。我々としては、到達目標の達成のためにはさらに何が必要となってくるのかということを検討し、この2点、学習指導方法の開発とe-Learningの活用が必要になってくると考えている。e-Learningについては、実際の授業においてどのような部分、どんなところが活用できるかということを現在調べている。e-Learningセットを一括して導入するのではなく、どんなところで使えるか、どんなふうにして使うのかということの研究している。その内容を今後皆さんにお話しする機会があるかと思うので、その時にはお集まりいただけるようよろしくお願ひしたい。

2004年度
全学共通科目シラバス

2. 授業の到達目標
- ①自由民主主義の原理と現状に関する知識を獲得し、理解を深めること
 - ②戦後日本政治の特徴と問題点について知識を獲得し、理解を深めること
 - ③市民参加型の政治の現状と可能性について自分の意見を構築できること
 - ④現代政治の重要争点について、自分なりの政策や解決策を構築できること

授業名	単位数	開講学期	後期
政治学A	2単位	開講科目コード	
授業名 (英文)	曜日・校時 月・1	科目コード	
講義科目 (英文)	市民の政治学 Politics for Citizens		
教官名	松井 康浩 (法学部)		
1. 授業の概要	<p>全学共通教育対象となるこの講義では、自由で民主的な社会の担い手たる「市民」の政治の学として政治学を教養として理解する。したがって、本町町長選挙の選挙活動のあり方でも、専門的政治学の科学的分析手法等も取り入れ、日本の政治体制もそれらに含まれることとする。「自由民主主義体制」(liberal democracy)の成立とその歴史を、市民の政治の学として理解する。また、近年の政治の争点を取り上げ、その解決策を講義する。</p> <p>①自由民主主義の原理と現状に関する知識を獲得し、理解を深めること ②戦後日本政治の特徴と問題点について知識を獲得し、理解を深めること ③市民参加型の政治の現状と可能性について自分の意見を構築できること ④現代政治の重要争点について、自分なりの政策や解決策を構築できること</p> <p>3. 授業及び学習の方法 講義形式での授業であるが、授業中が110分間に講義と質疑応答の時間があり、レポーターを呼び出し、各々が発表を行う。また、授業を進めるにつれて、各講義には授業外の読書の課題が不可欠となる。</p> <p>4. 単位の算定方式 2. における4点の授業の到達目標に照して、各自の進捗状況を小テストと期試試験で確認し、期試試験を求め、期試試験のレポーターの提出点をそれぞれ加味して、総合点で単位認定を行う。</p> <p>(1)到達目標①に関する小テスト(2回=25点) (2)到達目標②に関する小テスト(4回=50点) (3)到達目標③に関する期試試験(50点) 5. その他 第1回目の授業でレポーターを呼び出してもらおうと必ず出席すること(提出なければ不合格)。質問等は、授業時間の他に、オフィスアワー(月曜日15時~18時)に研究室(法学部3F)にて受け付ける。</p>		
2. 授業の到達目標	<p>①自由民主主義の原理と現状に関する知識を獲得し、理解を深めること ②戦後日本政治の特徴と問題点について知識を獲得し、理解を深めること ③市民参加型の政治の現状と可能性について自分の意見を構築できること ④現代政治の重要争点について、自分なりの政策や解決策を構築できること</p>		

2. 問題提起－「学生による授業評価」と「教員による成績評価」から－

(1) 「学生による授業評価」：共通質問項目の二つの流れ

- ① 教員の教育に対する態度（Ⅱの1～3）と総合的満足度（Ⅳの2）
- ② 授業の到達目標（Ⅲの1～3）と到達目標の達成度（Ⅳの1）

①は従来からの質問で、相互に非常に強い相関関係がある。②は今回から新しく用意したもの。

②の方をみると、到達目標について、シラバスでの書き方や授業での組み立てについていえば（Ⅲの1・2）、意外と評価は高かった。しかし、授業時間以外の学習を促す工夫（Ⅲの3）は、外国語・教養ゼミを除くと不十分で、そこからか、到達目標を達成できたかという点（Ⅳの1）は、総合的満足度（Ⅳの2）と比較すると低かった。但し、Ⅳの1とⅣの2は、どの科目でも相関係数が高かった。したがって、Ⅳの1は全体的に高くなかったが、それでもそれが高い科目は、満足度も高かったということにはなるだろう。

なお、授業時間以外の学習時間は、下の表をみると、2003年度後期と比較すれば、どの科目も上昇している（特に、既修外国語と共通科目）。まだまだ不十分であるが、それでも、ここには②の系列に並べられているような教育改革は少し効果を出しているとみてよいかもしれない。

→今後とも、学生に授業時間以外の学習を促し、結果的に、到達目標が少しでも達成できるように工夫していく必要がある。

2003年度後期 授業時間以外にどれくらい学習したか（5段階評価）

主題科目	共通科目	既修外国語	初修外国語	日本語	教養ゼミ	健康スポーツ
1.46	1.55	2.27	2.21	2.48	2.17	1.38

(2) 主題科目と共通科目

主題科目の方が全体的に点数が高かったが、授業時間以外の学習を促すという点（Ⅲの3）とそれ故授業以外の学習時間（Ⅰの1）だけは、共通科目の方が高かった。他方、相関係数をみると、Ⅲの3の項目とそれ以外の項目との相関係数が、主題ではそこそこに高いが、共通科目はそれと比較すると低かった。また、Ⅰの1の項目とそれ以外の項目との相関係数も主題の方が高かった。要するに、ここには、学問のおもしろさが表に出てくる主題科目と学問の専門性が表に出てくる共通科目との違いがあり、共通科目の場合、学生の自発的学習というより、教員からの強制という側面が強いように感じられる。来年度以降の共通科目の再編成で、専門科目の入門授業（理系の科目）といった位置づけがあまりにも表に出てくると、この評価は一層厳しくなるかもしれない。

→来年度以降の課題となろう。

上記の問題をもう少し細かくみると、共通科目では、Ⅰの1とⅡの1は若干であるがマイナスの相関係数になっていて、何も相関関係は見いだせない。Ⅲの3とⅣの2も相関係数が高くない。教員が熱心である場合（Ⅱの1－熱演型の授業）、独り相撲になって、学生の授業時間以外の学習時間があまりないということが考えられ、逆に、授業時間以外の学習時間を多く課す場合（Ⅲの3）、満足度が、低下するとまでは言えなくても、上がりはしないということになる。どちらが優れているということではなく、ここには科目の特性という側面もあるだろう。

(3) 既修外国語と初修外国語

既修外国語は、テキストや到達目標にTOEICを利用するという体制を組んだことへの最初の評価であった。満足度では、従来は初修外国語より高かったが、今回は低くなった。点数の高低だけを問題としても意味がないことは明らかである。たとえば、授業時間以外の学習を促す工夫や実際の学習時間では、全学共通科目のなかでは一番点数が高かった。学習を要請されることは必ずしも満足度を上昇させるものではないという意味では、満足度が低下したことが問題であるわけではない。むしろ、これらの点数は、昨年より始まった改革の出発点の点数と位置づけ、今後の一層の改革を目指したらよいのではないか。

初修外国語では、他の科目では出てこない特徴がある。授業以外の学習時間（Iの1）と他の質問項目との相関係数が高く、なおかつ、成績優秀者率と学生の授業評価の質問項目との相関係数が高い。教員が熱心で一生懸命やっていると、学生もそれにつられて学習をやり、結果として成績もよい成績を取っているという好循環（但し、教員がやる気がないと悪循環）が作用しているように見える。

(4) 教養ゼミと健康スポーツ科目

いずれも従来から、評価の点数が高い科目であり、今回もその点は変わらない。特に、両科目とも、（他の科目なら低い）到達目標を達成できたかという質問項目（IVの1）の点数が高い。これは、少人数の授業であることや教員と結びつきが濃いことが影響しているように思われ、こうした（双方向性の）科目の重要性は変わらないと言ってよいだろう。なお、教養ゼミはSの率が他の科目と比較しても高く、なおかつバラツキも大きい。休まず出席して、報告やレポートの提出をきちんとやった学生に何を与えるか、という点についての全学的な合意がほしいところである。

(5) Sの率と不合格率

2003年度から、この資料が教員に公開されるようになり、そこで、GPA制度の運用とも絡んで、とりわけSの率についての議論が本格化し始めた。2003年度全体と2005年度第一学期とを比較してみると、公開されるようになったからといって、成績の出し方がどこかに収斂するという形にはいまのところなっていないように思われる。

→情報が公開され、公開された情報の説明責任さえ果たすことができるなら、成績の出し方は、個々の教員の教育の自由として堅持されるべきである。その意味では、2003年度から今回の流れは、まずまず望ましい結果であったといってよいのではないか。

2005年度第一学期「学生による授業評価」と教員による成績評価 全学共通科目

	質問項目	主題科目 全体	共通科目 全体	既修外国語 全体	初修外国語 全体	教養ゼミ 全体	健康・スポー ツ 全体
I	1. 授業以外どれぐらい時間を使いましたか	1.58	1.94	2.97	2.46	2.33	1.48
	2. 授業に熱心に取り組みましたか	3.27	3.25	3.70	3.68	3.94	4.44
II	1. 教員の授業に対する熱意が感じられる	4.01	3.88	3.97	3.93	4.16	4.43
	2. 教員の話し方は明瞭で聞き取りやすい	3.76	3.51	3.70	3.56	4.10	4.38
	3. 学生の理解度を把握して授業を進めている	3.36	3.12	3.66	3.65	3.82	4.20
III	1. シラバスに、授業の到達目標がわかりやすく書かれている	3.75	3.66	3.69	3.76	3.92	4.10
	2. 授業の到達目標の達成に向けて、授業全体が組み立てられている	3.73	3.56	3.66	3.75	3.98	4.22
	3. 授業時間外の学習(予習復習等)を促す工夫がなされている	2.80	3.02	3.99	3.75	3.68	3.16
IV	1. あなたは、この授業の到達目標を達成できましたか	3.35	3.18	3.36	3.29	3.78	4.26
	2. あなたは、総合的に判断して、この授業に満足していますか	3.62	3.38	3.64	3.75	4.06	4.46
	回答数	3788	2800	2433	1000	905	907

出席率(1)	回答数/履修登録者数	0.75	0.69	0.93	0.90	0.93	0.90
出席率(2)	回答数/成績登録者数	0.79	0.72	0.96	0.94	0.94	0.92
合格率(1)	(S+A+B+C)/履修登録者数	0.84	0.82	0.93	0.91	0.97	0.95
合格率(1)	(S+A+B+C)/成績登録者数	0.89	0.85	0.95	0.95	0.98	0.97
成績優秀者率	(S+A)/成績登録者数	0.43	0.39	0.45	0.45	0.77	0.69

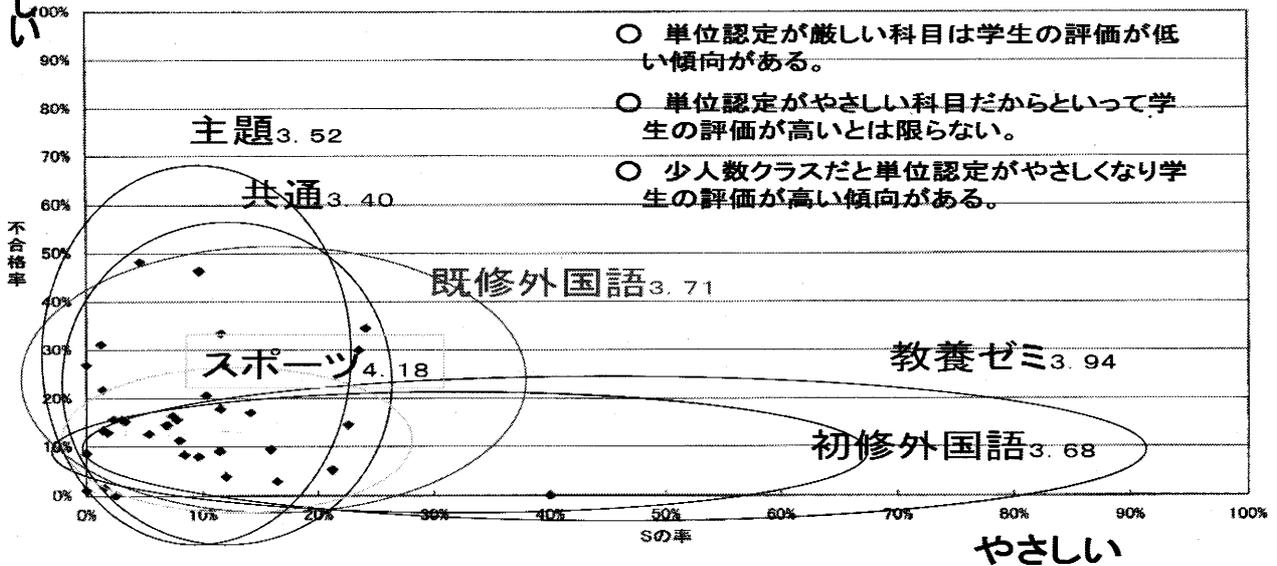
学部開設科目

	教育学部全 体	法学部(昼 間)全体	法学部(夜 間主コー ス)全体	経済学部 (昼間) 全体	経済(夜間 主コー ス) 全体	医学部 (医学科) 全体	医学部 (看護学科) 全体	工学部 全体	農学部全体	
I	1	1.87	2.08	2.23	1.87	1.74	2.13	2.32	2.11	1.76
	2	3.58	3.43	3.50	3.32	3.32	3.30	3.51	3.26	3.28
II	1	4.26	4.06	4.18	3.89	3.67	3.76	3.95	3.70	3.75
	2	3.98	3.82	3.91	3.51	3.45	3.67	3.66	3.52	3.55
	3	3.64	3.43	3.49	3.25	3.31	3.40	3.36	3.19	3.19
III	1	3.76	3.78	3.94	3.65	3.64	3.60	3.82	3.48	3.54
	2	3.89	3.73	3.94	3.65	3.58	3.56	3.66	3.48	3.56
	3	3.29	3.14	3.49	3.17	3.01	3.24	3.35	3.28	2.96
IV	1	3.58	3.29	3.34	3.24	3.27	3.34	3.32	3.14	3.19
	2	3.91	3.67	3.77	3.50	3.44	3.49	3.52	3.32	3.46
	回答数	3755	2608	280	5683	535	1373	1146	4892	2835

出席率(1)	0.87	0.75	0.67	0.57	0.56			0.81	0.82
出席率(2)	0.89	0.79	0.85	0.71	0.72			0.91	0.86
合格率(1)	0.95	0.78	0.70	0.68	0.70			0.74	0.87
合格率(1)	0.97	0.82	0.88	0.84	0.90			0.83	0.92
成績優秀者率	0.59	0.27	0.24	0.28	0.43			0.35	0.43

厳
い

Sの率と不合格率(2005年度前期-共通科目)



共通科目	Iの1	Iの2	IIの1	IIの2	IIの3	IIの4	IIIの1	IIIの2	IIIの3	IIIの4	IVの1	IVの2	Vの1	Vの2	出席率(1)	出席率(2)	合格率(1)	合格率(2)	成績優秀
Iの1	1.00																		
Iの2	0.41	1.00																	
IIの1	-0.07	0.58	1.00																
IIの2	0.04	0.55	0.75	1.00															
IIの3	0.15	0.75	0.80	0.90	1.00														
IIの4	0.02	0.66	0.57	0.66	0.80	1.00													
IIIの1	0.26	0.68	0.76	0.67	0.71	0.56	1.00												
IIIの2	0.19	0.77	0.80	0.71	0.80	0.70	0.91	1.00											
IIIの3	0.82	0.57	0.20	0.29	0.41	0.31	0.48	0.45	1.00										
IIIの4	0.24	0.73	0.65	0.78	0.85	0.71	0.60	0.68	0.44	1.00									
IVの1	0.29	0.87	0.69	0.64	0.84	0.70	0.75	0.82	0.46	0.76	1.00								
IVの2	0.19	0.84	0.77	0.79	0.95	0.82	0.76	0.88	0.45	0.81	0.93	1.00							
Vの1	0.29	0.67	0.46	0.41	0.55	0.56	0.48	0.60	0.47	0.55	0.49	0.59	1.00						
Vの2	0.15	0.70	0.78	0.76	0.89	0.76	0.72	0.80	0.33	0.78	0.85	0.91	0.56	1.00					
出席率(1)	-0.02	0.42	0.21	0.03	0.16	0.12	0.26	0.34	0.16	0.21	0.28	0.24	0.30	0.00	1.00				
出席率(2)	-0.06	0.40	0.25	-0.01	0.14	0.13	0.27	0.36	0.14	0.20	0.25	0.23	0.35	0.04	0.94	1.00			
合格率(1)	-0.19	0.17	0.28	0.23	0.28	0.09	0.24	0.22	-0.05	0.15	0.36	0.32	-0.14	0.15	0.46	0.31	1.00		
合格率(2)	-0.25	0.14	0.36	0.21	0.28	0.12	0.28	0.27	-0.07	0.16	0.34	0.32	-0.11	0.21	0.42	0.41	0.90	1.00	
成績優秀者	0.28	0.42	0.23	0.27	0.39	0.11	0.28	0.28	0.40	0.12	0.41	0.42	0.16	0.23	0.14	0.08	0.34	0.27	1.00

主題科目	Iの1	Iの2	IIの1	IIの2	IIの3	IIの4	IIIの1	IIIの2	IIIの3	IIIの4	IVの1	IVの2	Vの1	Vの2	出席率(1)	出席率(2)	合格率(1)	合格率(2)	
Iの1	1.00																		
Iの2	0.47	1.00																	
IIの1	0.61	0.69	1.00																
IIの2	0.26	0.61	0.67	1.00															
IIの3	0.29	0.73	0.70	0.86	1.00														
IIの4	0.26	0.60	0.40	0.40	0.56	1.00													
IIIの1	0.49	0.80	0.67	0.58	0.75	0.58	1.00												
IIIの2	0.53	0.83	0.79	0.73	0.84	0.57	0.92	1.00											
IIIの3	0.76	0.67	0.71	0.66	0.72	0.50	0.66	0.73	1.00										
IIIの4	0.33	0.72	0.56	0.65	0.77	0.54	0.80	0.81	0.62	1.00									
IVの1	0.33	0.88	0.65	0.72	0.83	0.69	0.78	0.82	0.67	0.85	1.00								
IVの2	0.22	0.83	0.67	0.81	0.89	0.63	0.77	0.83	0.61	0.86	0.95	1.00							
Vの1	0.36	0.45	0.28	0.19	0.27	0.25	0.47	0.44	0.29	0.38	0.40	0.38	1.00						
Vの2	0.33	0.73	0.75	0.80	0.86	0.45	0.80	0.87	0.59	0.82	0.85	0.90	0.48	1.00					
出席率(1)	-0.37	0.20	-0.16	-0.03	0.03	0.12	-0.01	-0.05	-0.32	0.11	0.22	0.19	-0.03	0.04	1.00				
出席率(2)	-0.05	0.08	-0.06	-0.07	-0.10	0.18	-0.07	0.00	-0.09	-0.15	-0.02	-0.06	0.08	-0.17	0.50	1.00			
合格率(1)	-0.31	0.36	0.20	0.30	0.31	0.14	0.13	0.13	-0.07	0.35	0.45	0.50	0.16	0.42	0.48	-0.05	1.00		
合格率(2)	-0.11	0.34	0.33	0.34	0.27	0.19	0.12	0.21	0.10	0.23	0.36	0.40	0.27	0.37	0.18	0.28	0.79	1.00	
成績優秀者率	-0.31	0.27	0.11	0.26	0.40	0.29	0.25	0.23	0.06	0.36	0.43	0.41	0.15	0.36	0.36	0.10	0.48	0.37	

I	1. 一週間のうち、授業以外にどれくらい時間を使いましたか 2. この授業に熱心に取り組みましたか
II	1. 教員の教育に対する熱意が感じられる 2. 教員の話し方は明瞭で聞き取りやすい 3. 学生の理解度を把握して授業を進めている 4. 視聴覚機器の利用が効果的である
III	1. シラバスに、授業の到達目標がわかりやすく書かれている 2. 授業の到達目標の達成に向けて、授業全体が組み立てられている 3. 授業時間外の学習(予習復習等)を促す工夫がなされている 4. この授業は、将来の自分にとって有益である
IV	1. あなたは、この授業の到達目標を達成できましたか 2. あなたは、総合的に判断して、この授業に満足していますか
V	1. 授業の受講者定員数は適切だと思いませんか 2. この授業は、全学共通(教養教育)科目としてふさわしい内容である
出席率(1)	回答数/履修登録者数
出席率(2)	回答数/成績登録者数
合格率(1)	(S+A+B+C)/履修登録者数
合格率(2)	(S+A+B+G)/成績登録者数
成績優秀者率	(S+A)/成績登録者数

共通科目と主題科目 の相関係数

第2部 来年度授業計画作成に向けたワークショップ

A. 主題科目分科会

最初に学生の授業評価に関していくつかの問題点が話し合われた。医学部ではオムニバス形式で1名が1回担当なこともあり、講義全体で評価されるのは、問題があるという事がとりあげられた。これに対する対応は評価委員会の問題ではあるが、最終的には各人ごとの評価ということになることを討議した。

次にデータを解析した結果より、話題提供として報告があり次の点が報告された。主題科目及び共通科目は単位の認定が厳しいため、やや低い評価であること。また評価がやさしいからといって必ずしも学生の評価が高いとは限らないこと。少人数や実技の科目では単位認定がやさしくなり、学生の評価が高いこと。次に相関係数からいくつかのことが明らかとなった。例えば「授業の組み立て」をしっかりやっておくと、学生は「熱心に授業に取り組み」、「シラバスに授業の到達目標がわかりやすく書かれている」と感じ、「この授業は将来の自分にとって有益である」と思い、「総合的に判断して、この授業に満足している」と考えていることがわかる。また「授業の満足度」は「教員が熱心に授業に取り組み、明瞭に話す」ことや「授業の組立がなされていて」「自分の将来に有益である」と関連する。これらのことは、十分に授業の準備を行い、到達目標を明示し、わかりやすく授業を進めていけば学生の評価も高くなるという、あたり前であるが、なかなか難しいことの実践が要求されていることが示された。

学生の成績評価をどのように行うか？ことに大人数での評価方法についても討議された。レポートにしても小テストにしても数が多いと、それを集計するだけでも時間がかかり、さらにそれらを読みかつ評価するとなると困難を伴う。しかし一方で「多元的で厳格な成績評価」が求められているので、この矛盾をどのように解決するかについて、各人の工夫が話された。また評価の高かった個人の先生の方法を参考にあげて話しあった。たとえば、レポートを3回くらいにわけて書かせるのだが、各回ごとに良いレポートを授業でとりあげて話し、自分の力で自分なりのレポートを書いた学生に高い評価を与えるというような方法が例示された。また別の例では主題科目ではあるが実習や実技のような方法で授業を進め、また提出物によって評価をしているといった報告もあった。大人数の教育をどのように行い、かつ学生の授業評価をどのように今後の教育に反映させるかということが真剣に討議された。

B. 共通科目分科会

第1部の問題提起に続いて行われた第2部の共通科目分科会では、32名の参加者があった。司会進行を辻上佳輝調査研究部員が担当し、第3部の全体討論において分科会報告者に教育学部の高橋尚志

教員を選出した。

その後、まず学生による授業評価全体に対する意見を求めたが、授業評価の内容そのものや評価結果に関する発言はとくになく、授業評価の実施方法についてのみ、以下のような意見が出された。

- 前回実施した学生による授業評価と今回とでは、質問項目がかなり違っている。このような内容の変更については、事前に教員に周知されてしかるべきではないか。授業の担当教員も、学生による授業評価において、どのような質問項目があるのかを知っておく必要がある。

これに対して、同席していた早川茂調査研究部長から、この質問項目は大学評価委員会で議論して決まったもので、その内容の周知は各学部の大学評価委員会委員から学部に対して行われているはずである旨の説明があった。しかしながら、当該発言者から、さらに、

- 少なくとも自身の所属する医学部では、そのような情報伝達はなかった。また、たとえそういう状況であったとしても、この結果を教員個人の評価に使うという方針である以上、「大学評価委員会→学部代表委員→教員」といった間接的な形ではなく、「大学評価委員会担当理事→教員」という直接的な周知方法をとるべきである。

との意見が出されたため、その要望については、早川茂調査研究部長から関係部門に伝えると回答した。

次に、学生による授業評価の質問項目Ⅰ-1（学生の自習時間）とⅡ-1（教員の熱意）との間に「-0.07」と値は小さいものの負の相関が認められることを取り上げ、この結果から、教員が熱心に取り組んでいればいるほど学生はシラケているという傾向が見て取れるのではないか、これをどのように評価するか、また、改善策があるとすればどのようなものか、という問いかけを司会者が行った。これに対して参加者から出た主な意見は以下のとおりである。

- なぜこのような傾向になったかは、教員ではなく学生に聞くべきである。
- 相関係数が絶対値で0.4以上ないと相関があるとは言えない。したがって、この結果は相関がなかったということを意味している。
- 共通科目は全般的に学生が聞くだけという受け身の形になりやすく、学生から積極的になることが少ないのではないか。
- 宿題等の課題を出さないと学生は勉強しないということ。したがって、これはむしろ、Ⅰ-1（学生の自習時間）とⅢ-3（時間外学習を促す工夫）との間に「0.82」という高い正の相関があると見るべきである。
- 学生の立場からは、興味のあるものは勉強するが、すべての授業について熱心に勉強することはできない。シラバスに記載されている「到達目標」を達成しなければならないことは前提だが、それをクリアしさえすれば、必ずしも時間を使うことばかりが重要ではない。
- すべての科目で宿題やレポート等を大量に課すようなことになると、そもそも限られた時間の中で、学生はこなすことが無理になるのではないか。

- 現状を見ると宿題やレポート等をもっと課すべき、という考え方もあり、要は程度問題である。
- 学習時間には講義のクラスの規模も大きく影響するのではないか。

この最後に出されたクラスの規模に対する意見の後、「多人数の科目は授業評価で不利になりやすいという傾向がある」との指摘があり、ここから論点が教室の配当の決め方、さらにはカリキュラム編成の方法に対する問題に移行した。そこでは、

- 教室の大きさに対して教員から希望を出せないのか。
- 教室の収容人数に関係なく受講者数の調整はできないのか。
- 受講生が数名といったような少数の授業は休講措置がとれないか。
- 同じ分野の学生が受講したい複数科目を同一時間帯に重複させるのは問題ではないか。

などといった疑問や意見が出て熱心な討論が行われたが、所定の終了時刻を迎えたため、司会者が分科会の終了を告げて第3部の全体討論に移った。

C. 教養ゼミナール分科会

第2部の教養ゼミナール分科会では司会進行を木村義雄及び古川尚幸調査研究部会委員が担当し、全体討論においての報告者として農学部の川浪康弘教員にお願いした。

この分科会ではある結論を出すとか、意見を集約するのではなく、情報交換の場として自由な意見を述べてもらった。

最初に簡単にどのような教養ゼミナールを行っているのかを紹介してもらった後に、今年度から学生による授業評価項目に到達目標に関連する事項が3項目加わり、これらを含め授業評価項目について意見あるいは感想を求めたところ、以下のような発言があった。

(1) 授業評価項目についての意見・感想

- ・他の科目と違って、教養ゼミの到達目標の設定は困難ではないか。
- ・教養ゼミナールでは予習、復習は課していない。
- ・後ろ向きの学生の意見は聞きたくない。
- ・出席率の低い学生、まじめに授業に取り組まなかった学生の意見は参考にならず、評価の対象からははずすべきではないか。
- ・いい加減な学生の評価を減らすために、学生の名前を記名式にし、学生もある程度責任を持って評価すべきではないか？
- ・数字だけが一人歩きしてしまうのでは？
- ・学部の学生がバラバラになるように班分けする必要がある。

続いて香川大学の中期目標にも掲げられている自主学習を促す工夫、到達目標の達成のための授業

改善等についてお聞きしたところ、以下のような意見があった。

(2) 授業評価項目（到達目標、自主学習等）における授業改善について

- はたして予習、復習する時間が学生にはあるのか？レポートなど限度を超えているのであればナンセンス。教員側が個々にレポート課題を与えるという政策は正しいが、トータルとして妥当性はあるのか？
→そういったことから、あえて自主学習よりも授業内で調べる時間を与えて発表会を行う形式をとった。（ただし、これは学生が優秀であることが前提条件で、授業の進展のなかで判断する必要がある）
- カフェテリア方式ではクオリティーは下がる。
- 学生に到達目標を周知、理解させることは重要だが、現在のところ特にその点について強調あるいは説明等は教養ゼミの授業内では行っていない。

最後に教養ゼミナールは例年学生への授業評価が高く、また、教員間での成績評価のバラツキが大きいことから、このことについて意見を伺った。

(3) 学生への授業評価について

- 早期卒業、特待生の点から教養ゼミの評価が問題になるのならば、Sの割合が高い科目はGPAの対象からはずすという処理をして、教養ゼミのように評価が高い科目が存在してもいいのではないか？
- 単位認定は「可」と「不可」だけでいいのでは？
- 受講している学生の層が違っていると比べることができない。
- 教養ゼミナールのように少人数の場合、テーマ等によっては非常に興味を持った学生あるいは優秀な学生が集中し、S+Aの割合が高くなるのが避けられない場合がある。

D. 外国語分科会

I. 既修外国語分科会

既習外国語（英語）分科会は、15時30分より教育学部425教室にて開催し、参加者は部会長を含めて17名であった。以下の手順に従って進行した。（当日の配布資料は末尾に別掲）

I. 部会長ならびにTOEIC-IPテスト担当教員より報告

1. 授業評価と成績評価

まず、授業評価の結果について別掲の配布資料に基づき、部会長より説明を行った。資料では、項目間の相関について、係数の高いものを図により提示し、「総合的な判断による満足度」との相関は多くの項目との間において高いことを示した。

成績評価の分析については、2003年度と2005年度前期とを比較すると、不合格率は若干低下し、

Sの割合については低くなった結果、妥当なところに落ち着いていることを報告した。

2. 平成17年度実施状況と検討課題

本年度の実施状況について、まず、1年次科目の2単位化が平成17年度より開始され、これに見合うだけの授業外学習時間を学生に義務付けるために、音読筆写作业を課することとなったが、前期分比べて後期分は要求学習時間量がふえ、これが法的に求められる単位認定に必要な学習時間数に照らしたときに妥当なものであるかどうかの検討が必要であることを述べた。

昨年度、学長裁量経費によって教育学部1年次生を対象に実施されたTOEIC-IPテストを、本年度より全学1年次生に拡大し、その第1回テストを7月16日（土）に実施した結果のデータが、実施責任者である永尾教員より報告された。データは、全学の平均点・最高点・最低点から、得点分布、セクション別スコア、学部・学科別スコア、男女別スコア等々にわたって提示されたが、ここには全学の平均点・最高点・最低点のみを掲出するにとどめる。

平均点			最高点			最低点		
Total	Listening	Reading	Total	Listening	Reading	Total	Listening	Reading
379.9	216.8	163.1	840	460	390	135	70	25

なお、この第1回テストでは、500点以上を得た学生は全体の10%程度で、300点に満たない学生が20%弱いたことが報告され、中四国圏内では300点以上を卒業要件とする大学もあることが併せ紹介された。

さらに、今後のTOEIC-IPテスト実施については、その実施時期や得点の取り扱いについて協議を続けることが求められるとの点が確認された。

2年次科目のテーマ別選択制については、教育学部・法学部・経済学部のクラスは従来の方針を踏襲し、本年度より新たに農学部・工学部のクラスについてもこれを導入したことを部会長より報告した。そのうえで、現在行っている方式、すなわち、各学期第1週目の授業時に学生が受講希望クラスに直接出向いて、人数調整を経たのちによりやく受講クラスが決定するというクラス選択の方法では、教科書購入の遅れ等によって、1週目ないし2週目の授業が実質的なものにならないとの意見が出ていることを取り上げた。

3. 平成18年度カリキュラム編成の基本方針

平成18年度の英語科目カリキュラムについて、1年次科目は17年度方針に従うが、一部、医学部看護学科が1年次後期の「英語コミュニケーション総合演習」を必修とすることに伴いクラス増となること、ならびに、旧制度下の不合格学生に対する再履修クラスの開講数を受講生数の減に対応して半減すること、が異なる点であること、2年次科目については17年度方針を踏襲して、選択クラス制を継続することを説明した。

また、TOEIC-IPテストの全学実施に伴い、検定試験等による単位の読み替えについて、従前はTOEICで500点を基準点としていたが、これを600点以上に引き上げ、他の検定試験もこれに準じて基準点を改めること、及び、再履修学生の読み替え認定基準点の下限は引き上げず、現行どおりとすることを紹介した。

〈補足〉

この読み替え基準点引き上げについて、11月7日に開催された英語科目小部会では、18年度より一斉実施という方向で決定していたが、その後、修学案内の親規定にあたる共通教育履修規則により、18年度入学生より年次進行により実施という形になるとの旨、事務方より連絡があり、18年度の共通教育修学案内には「18年度入学生より適用」と「17年度以前入学生に適用」とに分けて掲載することとなった。

II. 質疑・応答

以上の報告に基づいて、質疑・応答ならびに意見交換が行われた。その主なものに次のようなものがあった。

Q：1年次科目において音読筆写が相当な負担になっているとの声が学生から上がっているが、どう対応すればよいか。

A：設置基準上の条件をも併せ検討して、妥当な学習量を割り出さねばならないと考えている。

Q：習熟度別クラス編成を導入する考えはないのか。

A：TOEIC-IPテストの実施時期との関連もあり、1年次前期は難しい。後期からの導入については可能性を検討したいが、2年次科目への接続の問題もあり、18年度より導入ということは難しい。ただ、効率的な指導体制という点からも、検討する意味は充分にあると考えられる。

香川大学共通教育
平成17年度FD資料
(Wed., 14 Dec. 2005)

既習外国語(英語)分科会

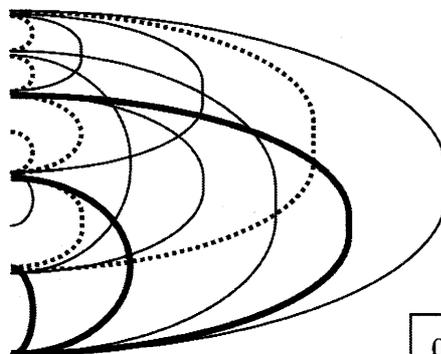
外国語科目部会英語小部会

I. 授業評価と成績評価

1. 学生による授業評価の分析

項目間相関度の高いもの

- I 1. 授業以外の学習時間
- I 2. 取り組みの熱心さ
- 1. 教員の熱意
- II 2. 話し方の明瞭さ
- 3. 理解度の把握
- 1. シラバスの到達目標
- 2. 到達目標達成への授業組立て
- III 3. 時間外学習促進の工夫
- 4. 語学力伸暢・異文化への興味
- 1. 到達目標の達成度
- IV 2. 総合的な判断による満足度
- V さらなる勉強への意欲



0.80~0.84	——
0.85~0.89
0.90~	——

2. 成績評価の分析

2003年度 → 2005年度前期

不合格率 →

S の率 →

II. 平成 17 年度実施状況と検討課題

1. 1 年次科目の 2 単位化

- 音読筆写作业による授業外学習時間の義務付け
⇒ 学習時間数の妥当性検討
- TOEIC による到達目標の明示と TOEIC IP テスト全学実施の導入
⇒ 実施時期の検討、IP テストの得点の取扱い

2. 2 年次科目のテーマ別選択制

- 従来の方針の踏襲 (L・J・E) と新規導入 (A・T)
⇒ クラス編成の遅れによる 1 週目乃至 2 周目の無駄

III. 平成 18 年度カリキュラム編成の基本方針

1. 1 年次科目

- 17 年度方針に従う
 - ※ 医学部看護学科の 1 年次後期「英語コミュニケーション総合演習」必修化に伴い、クラス数を増やす
 - ※ 旧制度下の不合格学生に対する再履修クラスの開講数を受講生数に対応して半減する

2. 2 年次科目

- 17 年度方針に従う

3. 検定試験等による取得級・点数の読み替え

- TOEIC テスト全学実施にともない、従前の基準点を引き上げて、TOEIC 600 点以上をその対象とし、他の検定試験についてもこれに対応する点数・級を調整する。

□. 初修外国語分科会

初修外国語部会では、集められた学生によるアンケートから次の様な調査部で取り纏められた顕著な傾向について先生方に紹介された。『初修外国語では、他の科目では出てこない特徴がある。授業以外の学習時間と他の質問項目との相関係数が高く、なおかつ、成績優秀者率と学生の授業評価の質問事項との相関係数が高い。教員が熱心で、一生懸命やっていると、学生もそれにつられて学習をやり、結果として成績もよい成績を取っているという好循環（ただし教員がやる気がないと悪循環）が作用しているように見える。』

この分析に対して、出席していた教員からは、行われているようなアンケートの実施態勢では、十分授業実態を反映しきれないことになろうとの指摘がなされた。チームティーチングを実施しているクラスでも、どちらか 1 クラスだけが評価の対象としてカウントされるためである。教育方針が外国人と日本人からなる編成方針である場合に、厳しい教員とそうでないと学生に映る教員のペアーが

評価される場合、教育方針の趣旨が評価に正確に投影されないうらみがあるということである。

授業運営面からは、学年歴の問題が話し合われた。外国語教育では、現地で実施される実習教育の効果に関心が高まりつつあるが、その実現に向けてカリキュラムを編成しても、ややもすると、8月に入っても試験が続行される事態が見られた。この期間に、セミナーが開催されるケースが多いので、こうした方面の国際化への改善も進めてほしいとの要望が出された。

E. 健康・スポーツ科目分科会

健康スポーツ部会では、昨年度のFD研修会を受けてシラバスを改良し、全授業の概要または到達目標に、各授業独自の到達目標とともに、健康スポーツ科目共通の到達目標である、スポーツ活動を通じての人間関係の構築や自主性・積極性・リーダーシップの養成等を掲げて授業を行ってきた。

今回、分科会ではそれを受けての「学生による授業評価」の分析をまず行った。教育学部、医学部をのぞく学部では本科目が選択（卒業要件に含む）科目であることと、受講希望学生が例年多く抽選で受講調整を行っていることなどから、受講生の授業への出席状況、取り組む態度等の意識が高く、ここ数年の授業評価でも受講学生の満足度など評価が高く、今回も同様の結果であった。今回、注目した質問に「授業に参加している教員や学生とよい人間関係を作ることができたか」という項目で、全体平均4.30は、各教員が単なるスポーツ指導のみでなく、学生間・学生教員間の関係をよりよくする授業づくりにあたってきたことが反映されたものと考えられる。今日の大学生を中心とする若者たちの、コミュニケーション能力の不足等が言われて久しいが、健康スポーツ科目は、こういった面で講義では養えないものを提供できるものと考えられる。

健康スポーツ科目の授業評価において、必ず低くなる項目に「授業時間以外での取り組み」である。学生たちが自由に使用できる体育館・グラウンド、スポーツ用具等の充実（課外活動とは別に）をはかることが大切であろう。

昨年度から健康スポーツ科目の成績評価について議論を進めてきた。これまでは、成績評価は担当教員によりまちまちであった。比較的安易に「A」や「S」が出やすい傾向であったが、これから各学部で学生のGPA等が、いろいろな形で利用されてくると、半期1単位とはいえ、学生にとっては重要な問題となることが予想され、教員間で成績の出し方に偏りがあったり、ほかの講義科目とのバランス等を考えると、なるべく科目内で統一した考え方をしておくのが懸命であると思われる。そのため第1歩として、実技科目の成績評価の特徴でもある授業出席をどう扱うかについて議論した。先に述べたように、自分の意思で受講した学生たちであるので、授業への出席率はもともと高いのであるが、それが「A」や「S」へつながるものではないことを認識してもらうために、全出席でも成績評価の60%まで、すなわち「C」レベルで評価し、残り40%を教員によって評価項目を決めることで進めてみようということになった。

参考資料 研修会アンケート

全学共通教育平成18年度実施に向けた研修会
参加者アンケート（回答数51）

* 今後香川大学の教育FDにおいて企画してほしいテーマなどがありますか。

〈研修会・ワークショップのテーマ〉

1. 講義方法	18
2. 討論技法	7
3. 授業でのIT技術活用技法	12
4. 学生の評価の仕方	17
5. 学生の指導方法	9
6. 教員と学生との関係づくり	3
7. 卒業論文の指導方法	3
8. カリキュラムの組み方	8
9. 大学教育（全体）のあり方	9
10. その他	5

* その他企画

1. 授業参観	9
2. 授業改善のための相談窓口	0
3. 優れた授業や教育改善に対する報告	7
4. その他	1

* 自由回答欄

A. 本研修会を受けて、お感じになったところ、参考になったところなどありましたら、
下の欄にご自由にお書きください。

“e-learning”について感心を持っていないので（私だけではないかもしれませんが…）他のテーマを聞かせれば（？）よかったと思う。たとえば、「学生の評価の仕方」とか、「学生と教員との関係」とか。率直に言えば、このセミナーはあまり実用的ではないと思う。

毎回思いますが、こういった形式での研修会、特に分科会にあまり意味があるようには思いません。（もしも）今後も行われるのであれば、次の点に重点を置いた会にさせていただけるとありがたいと思います。

- ① 当該授業（例えば「共通科目」）の基本的目的、内容のレベル等についての担当者（全員）の共通認識の形成。
- ② すでに行われた授業から導かれる具体的な対策であったり留意点についての申送り事項（のようなもの）

e-learning の特徴について、わかった。現時点では、人文科学では、従来のような、基本的な文献を読ませる方が、いいのではないかと思う。

主題部会で、自己評価の高かった先生の工夫された点を紹介してもらい、非常に参考になった。（もっとこういう秘訣を紹介する時間を増やしてほしい。まさにそういうことを知るために来ているのだから）少し自己評価のデータや相関係数とかに固執しすぎているのではないかと思う。

主題グループ

- ・板野先生は評価の見方について良くまとめられていたと思う。参考になった。
- ・グループ討論は良く言えば問題提起、悪く言えば不満の発露になっている。あらかじめアンケートをとってその中で重要と思われる点を取り出して討論する方が良いのでは。

来年度の授業に生かさせていただきます

到達目標の設定の仕方がまちまちであろう。その工夫が必要と感じた。特にオムニバス形式で実施している主題科目などに於ては、オーガナイズする人の努力と技量に負うところが大きいだろう。参加する教官が一同に会して最初にきちんと主旨や目標などの議論と意思統一をしておくことが重要かと思われる。

全学共通教育がようやく定着したように感じる。しかし大学教育がようやく全学で行動をする動きは認められるが、評価、評価が前面になる討論が少々教員としては不安となる。相関と評価のギロンは？
〈内容のギロンが少いのではないか〉

100人以上の参加はすばらしい

- ・今年も無内容な研修会であった。時間のムダ使い。
- ・教育の内容・方法についての話し合いなどまっただくなかった。カリキュラムの編成方法や、各種の決定通知の仕方についての見直し要求などがあつたくらいだ。

大学の教育において、最も重要な事は、どの様にして学生に理解させるのかを考える事だと思います。今日のFDでは、授業の内容や方法の改善については全く話し合われていなかったと思います。各教員は、学生が熱心に参加出来る様に内容を考えるべきだと思います。

2003年にくらべ今年度の不合格者とSの率が、特に英語に関して良い方向に変化してきていると思

ました。

こういった研修会は大切かと思えます。大学の弱点はまさにここにあると思えますので、意義深い研修会でした。

e-learning についての説明は楽しいものでした。

医学部の先生の話を受けて、見方の違いが面白かった。

e-learning について理解が深まって良かった。共通科目部会の分科会はいへん不愉快な発言があって、貴重な時間を十分活用できず残念だった。コーディネーター役は重責だと思うが、短い時間なのでテーマ等絞って何らかの議論ができるように工夫をして頂きたかった。

科目領域は本当に動いているのか疑問を感じた。また、共通教育全体が組織的に連携がとれているのかにも、疑問がある。

授業評価の結果について、いかに解釈すべきか、幾つかの考え方があるようであり、そのあたりを巡っての議論が必要ではないかと思った。

授業評価アンケートの項目、「授業以外でどれだけ勉強したか」は、不要では？他の項目との相関も特になく、「授業に熱心に取り組んだか」で十分代替可能と思う。使うにしても語学系の科目だけに限定すべきでは？受講者の数によって学生の意欲やマナーは大きく変わるので、受講者制限を検討してもらいたい。

初めて共通科目を担当するため、シラバスの書き方や授業内容を考える上で大変参考になった。共通科目では、科目別のFDも必要と感じた。

学生の評価がすべてではないと思えます。カリキュラムや教育上の必要性から教える内容、やり方が大きく影響を受けることになります。

分科会での意見が散漫で、なかなかまとまらなかった。もっと具体的な改善に絞って討議すべき。

e-learning についてよくわかった。学生の満足度を上げる必要性を感じた。

今回、分科会のワークショップも設置され、より具体的な視点、資料、問題点を紹介していただけ、とても興味が喚起された。卑近なものから全体への展望があると思うので、とても有益であったと感じています。

全体として良く構成されていたFDだと思う。ただ分科会の進め方には、もう少し工夫が必要であったかもしれない。評価の高い先生の話をお聞きすれば参加者の参考になったのではなかろうか。

問題点・疑問点を共有できてよかったです。

全学教育が向上しているという手ごたえを感じることができて良かった。

e-learning の現状や問題点が少しわかった。

いろいろな学部の先生方の意見が聞けて良かったです。全学共通教育の目的（何をどこまでするのか）がはっきりしていない印象を持ちました。

e-learning の現状と問題点についての話題は大変参考になった。多人数授業での工夫について参考になった。

e-learning のお話しで、いろいろ新しい情報を得ることができ、参考になりました。ありがとうございました。

今回のFDを受けたことによって、“実際に” 講義の質や、学生の顧客満足が高まるとはとうてい考えられない。形式的な通過儀礼に終始しないようにしてほしいです。授業評価の分析における相関分析に関しては興味深く拝見しました。例えばシラバスにおける到達目標（Ⅲ－1）は、総合的満足度（Ⅳ－2）と高い相関があるかどうか疑問が残るという点は実に興味深い。Ⅳ－2 との18変数中の相関の高い順位は、主題で8位、共通で9位、既外で6位、初外で7位、教ゼミで8位、スポーツで14位となっている。つまり総合的満足度を上げるにはシラバスに到達目標を明述するよりもより効果的な方法があるということだ。もちろん、有意性を検証するための検定と有意水準の確認、多重回帰分析や因子分析を行わなければ、より明確なことは言えないが、単相関だけでは足りないことは（統計学を勉強した）1回生でも知っている。また教員の講義に対するモチベーションの向上や、質の改善のために、徹底した賞罰インセンティブシステムの導入が必要と考える。例えば各カテゴリー別に授業評価の上位5つの講義に全学から相当程度の教育活動費を配分するなど。

e-learning や、授業評価のよみとり方等、刺激になりました。ただ、分科会については、始まってみると、もう少し時間があるとよいと感じましたが、あまり長時間の計画をたてると参加者が減ってしまう可能性もあるので、時間配分等、計画の立て方は難しいだろうと思います。

分科会では司会者が事前に準備しておくことが重要だと思います。

Sの率、不合格率のちらばりについて参考になりました。

成績をつけるのは難しい。評価の観点を行動目標レベルまで具体化する必要があるようだ。

新人研修が本学にはあるが、それ以外にマニュアルが必要ではないだろうか。例えば新人ではないが主題科目は初めて担当する、などのケースが考えられる。(上記はFDに限った問題ではないが)

他の科目の状況をお聞きできた点が良かった。

全学部の人が集まるのがこの会の良いところと思います。

e-learning の状況について、聴講は興味があった。実施についてはむずかしい面が多々あるようで、今後の進展報告を待ちたい。

むだ話が多かった

教務委員会レベルで扱われるべき改善要求の意見が多いように感じた。

C. その他、本研修会や教育FD活動、本学の教育に望むことなどございましたら、ご自由にお書きください。

・・・とはいえ、勉強になりました。ありがとうございました。英語の担当ですから、これからもっと頑張りたいと思います。

最初に行われた全体会の内容は意味あるものであったと思います。安井先生による授業評価の分析は興味深く拝聴しました。しかし、その後の分科会で授業評価中心の話になったのは残念でした。担当者が集まる分科会のテーマとしては無意味だと思います。学生による授業評価にふり回されているように思います。もっと志の高いFDを行っていただきたいと思います。

主題を同じ主題グループとして担当する教員同士が一度集まって、どういうテーマで統一するかを話し合う機会があってもいい。主題は「何でもいい」「何をしゃべってもいい」という雰囲気がある。主題のテーマは、教員の専門から逆に作っていてもいい。こういうことをやれる先生が集まって・・・

多元的成績評価（試験だけでなくレポートなどを導入する）を全科目で行なうと、たぶん学生の自由時間がなくなる。教員としては予習復習の評価点が低いと気になるので、レポートや宿題を課す人が増えると思う。良いのか悪いのか・・・

学生による評価が高かった講義を参観もしくは模擬授業見る機会をもちたい。

教育GPが取れるような企画作りをしてほしい。

教員の自己評価が重要なポイントかと思える。教員の自己評価と学生評価との相関がみたい。教員にとっての教員の位置づけを明確にする評価がほしい。特に全学共通教育を自分お大学人としてどう位置づけるかが重要か。

全体報告にとる時間を少なくしてよいのではないか。科目別の時間をもっと多くとるべき。

もっと細かく分科会を分けてはどうか。主題科目の中でも主題群ごとに、共通科目でも、人文系、社会系、理工系、というぐあいに。

先生方が皆さん、とてもお忙しい中集まって来られ、各々が学生の理解向上のために改善したいと願っています。出来るだけ有意義なディスカッションが出来る様、十分な時間をとって頂きたいと思いません。

私が学生でありました20数年前は大学卒業後はすぐ就職するというのがあたり前でした。又、当時はいったん就職すれば、特に男性は一生その企業で働くのが普通でした。その後経済が思うように行かなくなり、「卒業即就職、一生そこで働く」という図式は大きく崩れてきています。こういう状況を利用して、大学は卒業していく子供をすぐに企業に送りこむことのみを考えず、ボランティアなどで海外にもっと積極的に彼らを送り出す・・・というのはどうでしょうか？全ては学生の意思次第ですがそういう方向に学生の意識を向ける努力を大学がしてもよいのではないのでしょうか。

多くの先生方が出席されたことが大きい。こういったFDは、参加の有無が教員評価の1つと思われる。

本日の会で何人かの発言を伺っていると、「本学の教育をよりよくしていこうとする姿勢」についてのFDがまず必要なのではと感じた。部会長はじめセンターの方、運営委員のご尽力はわかるが、根本的な教員の姿勢についてはもっと違った方法の検討が必要と思う。来年度以降のFDの内容・プログラムを工夫して頂きたい。

授業回数は試験を含めて15回でいいのではないかと思います。

あらかじめ本学の教育に望むことを記入して提出したが、それについて全くとりあげられなかった。

- ・多人数授業に対して下の支援をお願いします。
 1. 出席管理システム（OCRを複数、処理ファイルのひな形の提供。出席カードの紙質を上げて、番号読みとりをやすくしてほしい）
 2. 第1回目の授業からのTA支援

・授業の工夫を全教員から集め、「共通教育Tips集」を作してほしい。

できるだけ具体的な事例（良い授業、悪い授業など）を取り上げてほしい。

「良い授業」にするための手法に近道はないと思うので、いろいろな意見を伺いながら個々で対応することが必要であると思う。その機会としてFDはたいへん参考になった。

多面的（授業）成績評価についてのFDを希望します。

FD等に参加すべきは学生からの授業評価が高い教員ではない、低い教員である。授業評価で平均値を下回る教員のみFDを行い、また教育・研究費の減額など実践性の高いインセンティブシステム設計をされた方が、すぐに効果があらわれると考えます。授業評価の高い教員のモチベーションを下げないような、および評価の低い教員のモチベーションを上げるようなFDをお願いします。そのためには旧ジェネレーションよりも20～30代の教員のアイデアを吸いあげるというのも有効では？

追1：次回以降、アンケートの自由記述スペースを広げていただけるとありがたいです。

追2：全学に学生用の多くの投書箱を設置して下さい。各学部、部局に2つずつくらい。どこに投函しても関係部局に届くようなシステムも。

アンケートで教員の授業に対する熱意をどういう点で判断しているのか。学習を促す工夫がなされているということについて、どういうことで判断しているのか。大ざっぱな数字ではなく、自由記述も含めて、よりよくわかるようなアンケートであれば、より参考になります。

受講者数での相関関係も出してほしい。同じ科目でも、年度毎の受講者数の影響が出ていないか。

重要なことですから、うまくご計画ください。平成18年度入学生は、文科省の教育改悪をうけた学生とききます。シラバスを作成するにつけてまにあうよう、気をつける点にかんする情報ていきょうをお願いしたいのですができないでしょうか。

時間を短縮して下さい。

- ① 教養教育用の各教室の設備（プロジェクタ、スクリーン）のさらなる充実（導入）を願います。
- ② 今回のFDの配布資料はpdf化してホームページにアップロードして下さい。
- ③ 教養の期末試験について、いろいろな注意事項を学生に説明する必要があるので開始時間を通常の時間の10分遅れにしてほしい。